

# ことばの遅れた子への援助の実際

—母親の情緒の安定をねらいとした教育相談を中心に—

足利市立相生小学校ことばの教室

塚 越 健 夫

## はじめに

「ことばの教室」という言葉の響きから、発音や言葉のつかえなど話し言葉そのものを問題にしている教室のように思われるがちだが、この教室の指導の中で、何よりも大切なことは、その子が本来持っている育つ力・発達する力を言葉の発達という窓口を通して保護者の方に理解していただき、心身共によい方向に発達してもらえるよう援助することにあると考えている。

ここに掲げた事例は、2歳4ヶ月の時にことばの教室に通い始めた幼児が、言葉を獲得していくまでの母親とそこに関わる教師の実践記録を綴ったものである。本学級のことを、少しでも多くの先生方に知っていただき、理解していただこうと思い、未熟な内容であるが記されていただくことにした。関係者の御指導がいただければ幸いである。

1. 児童名 K・O (生年月日 昭和63年12月27日生まれ 3歳7ヶ月) 女
2. 初診日 平成3年4月23日 (2歳4ヶ月)
3. 家族 父親36歳 母親31歳 姉5歳 祖母61歳
4. 主訴 2歳4ヶ月になるがことばが「パパ」「ママ」「バーバ」「チー」「ジュー」「ジョージョ」程度で同じくらいの子に比べかなり発語が少ない。

## 5. 生育歴

(1) 妊娠中	異常なし	(3) 乳幼児期
(2) 出産時	普通分娩 (産声を聞いた) 体重 2,980g 栄養 混合、良好	首のすわり 3ヶ月 離乳 6ヶ月 始歩 10ヶ月 始語 1年 医学的所見なし

母親は、

1歳8ヶ月ぐらいまで(気にするまで)手のかからない良い子だった。それを良いことにせつて家事等をし、かまってやることが少なかった。

そのこともあってか、一人遊びを好み、その遊びも今のところ車に乗ることやブロック・パズルと決まっていて広がりがない。また、ブロック・パズルの出し入れを何回も繰り返したり、自分でコップ、椅子、ブランコに固執するといった「こだわり」の強い点も気にかかる。掛かりつけの小児科医にも相談したところ心配無いと言われた。

と言っている。

## 6. 初診時の本児の状態及び所見

母親に抱きついたまま離れない。女教諭のM先生が、言葉を語り始めるころの、幼児が好む

「型はめ」を持ってきて、遊ぼうと優しく誘いかけても目を合わせようともせず、力強く母親の胸や肩に顔埋めているだけだった。とうとう母親との話が終わる1時間半もの間、その様子は変わらなかった。

成育歴には大きな問題は無く、小児科医も「心配無い」といっていることから、見ることのできなかった運動面（手・足の動き）への遅れは無さそうだ。

ただ、2才児としての対人関係、遊び、感情のコントロールにはいささか問題がありそうである。小児科医が情緒障害への心配も無いと診断しているならば、「母子関係の歯車が順調に噛み合って来なかったのでは」と推察される。「1才8ヶ月（気にする）まで手のかからない良い子で、それを良いことにせっせと家事をしていた」と言う母親の言葉が気にかかる。

## 7. 指導方針

上記のような状態に加え、2才半になっても10個程度しか単語がない本児を目のあたりにしている家族の人たちの心配は、これから益々母親の負担となって押し掛かっていく、そして母親の情緒の安定が保証されず、これからのコミュニケーションを含めた母子関係に大きな支障をきたす恐れも感じられる。もしそのようなことになれば、本児の言葉は益々遅れ、知的障害へと発展させてしまうことにもなりかねない。

そこで、母親の教育相談を含めた本児への援助指導を進めるにした。

援助指導は、「本児が楽しいと思える活動に意欲的に取り組ませ、その中で発語を促すと同時に人と関わることの喜びを味わわせる」ことをねらいとした指導を週一回の割合で進めていきたいところだったが、母親に余計な心配をかけまいと思い、「必要に応じて月1回でも2回でも」ということで開始することにした。

## 8. 指導過程

指　導　内　容	
H. 3	
5／18	ブランコ、滑り台、ぬいぐるみ、玩具が目に映るプレイルームだったが、初めてであり、かたくななく母親に抱きついたまま離れようとしなかった。 家では、2才年上の姉とよく遊べず、物の取りっこになると絶対に譲らない、逆に噛みついたりして姉を負かしてしまう程である。 父親は本児をうっとうしく思っているようで、上の子は可愛がるが、本児に対してはあまり構わず、食事のときなども自分のものに本児が箸を入れたりすると機嫌を損ねる。
6月	に入り母親から毎週一回、指導を希望したいという電話を受ける。
6／15	30分ほど母親に抱きついたままだったが、自分から離れ、活動し始める。

- ・ 滑り台の登り降りを何回か繰り返した後、積木を積む。積木で何か形をつくるというのではなく、ただ、三角形も正方形も長方形もみな横にして積み上げていく。そのうち突然、ばらまく。時間がきたので母親が片づけ始めようしたら、怒り、片づけさせない。結局片づけないまま帰る。

6／17 来室の途中、医者に寄ってきたということで泣きながらの来室。

プレイルームが気にいっているようで入ると泣き止む。

- ・ 輪投げの輪を母親の座っている机の上に、2個両手で持って来て置く。
- ・ 次に、積木を持って来て、積んである輪の上に積んでいく。母親が手助けしようとすると怒る。
- ・ 滑り台を滑るが側から立ったまま登り、最上段から飛び降りる。
- ・ トランポリンから飛び降り、寝転ぶ。
- ・ ブランコに母親と向かいあって乗り、「ブー」と言って頭を振る。Tが真似して頭を振ると、嬉しそうな顔をして喜ぶ。
- ・ アヒルの形をした車に乗ったので、Tが押してあげると泣き出す。まだ早かったようである。

家では、

大人の物と同じものを求めるようになった（食事のときの皿など）

アカンバーをする。（姉の真似をするようになった。）

- \* 「『人への模倣』ことばを覚えるのも『人への模倣』があればこそ、ことばの芽が育ち始めています。大切に育てましょう」と助言する。

7／1 抵抗なく教室に入るようになった。

- ・ 2歳ぐらいで言葉も出始めている子なら喜びながらやる「形はめマッチング」だが、本児は、形を全部はずし、バラバラにしてちらかしてしまう。
- ・ 積木も持ってきてバラバラに積む。
- ・ 滑り台に乗って飛び降りる。
- ・ オルガンに立てかけてある折りたたみ椅子に足を駆けてよじ登り、オルガンの上に置いてあった玩具のピアノに股がりパカパカする。
- ・ 平均台をTが片足で踏み込んで降りたら、それを真似する。
- ・ 平均台に股がりパカパカし、そのうちTの腕を取り一緒にやれと誘う。

- \* 慣れてきたのか、少しずつこちらを受け入れてくれているようである。

人への抵抗が無くなり、人を受け入れる気持が育つことは、同時にことばが育つこと

でもあり、とても喜ばしいことであることを母親に話す。

7／8・形はめマッチングをばらす。

- ・輪投げの輪を積み、母親に一つ「ハイ」と言って渡す。
- ・オルガンから飛び降りる。
- ・平均台に股がりパカパカする。
- ・「お母さんと一緒に」のテープを聞く。好みの曲のときは、手足の動き、顔の表情までが止まり、じっくり聴いている。
- ・母親がおばあちゃんの話をTにしていると、思い出したのか、ドアのところへ行きバイバイと手を振る。

家では、

「ばあちゃん」という言葉が出てきている。

母親から

兄嫁から「この子は、きっと自閉症よ。知っている自閉症児の子に行動がよく似ている。」と言われ、意地悪されたことの悔しさと新たな不安をぶつけてきた。

- \* 本児は、視線が合わなかつたり、母親や私を道具として使つたりすることもなく、好きな姉を始めとする家族の者への模倣があつたり、私とも一緒に遊ぼうとしたりする。こうしたことから考えると人との関係がこれからも育ち、伸びていくことが期待できることを話す。

9／2 Tを見るなり両手を挙げ、嬉しそうな顔をする。

- ・Tの手を引っ張って平均台に誘い、一緒にパカパカをする。
- ・なにげなく椅子に腰掛けたが、その姿勢にたいへん落ち着きが感じられた。
- ・帰るとき「バイバイ」という言葉を発する。

家では、

近所の子どもと遊ぶようになり、明るくなってきている。お姉ちゃんのことを「チー」と呼んでいるが、その呼ぶ回数も増えてきている。

母親は

「お姉ちゃんが幼稚園に通い始めた頃、早生まれでもあったので、『幼稚園で、

楽しくやっているのだろうか、泣いているのではないだろうか、そのうち、幼稚園から連絡があるのでは』と心配で、家に齧りつき、本児のことは気にかける余裕も無かった。」ことを反省し、話す。

「かまってあげる」ことが子どもの発達にどれだけ大切なことだかを気づき始めている様子。

#### 9／9 Tの顔を見ると嬉しそうな顔をして教室に入ってくる。

プレイルームでの遊びは、平均台のパカパカ、滑り台とあまり変わらない、しかし、時間は短いがTと関わる遊びが少しずつ増えてきており、表情にもにこやかさが出てきた。

#### 9／30 略。

#### 10／7 嬉しそうに教室に入って来る。

- ・ センサーボックス（箱に玉を入れる入口が一つあって、中は四つの部屋に区切られている。玉を入れると四つのうち何処かの部屋に、その部屋特有の音を鳴らしながら入る仕掛けになっている。そして、音で判断し部屋を当て、開けて確かめることができる）に夢中になり30分ほど声も出さず何度も何度も玉を入れては出し入れては出していた。そのときの表情はとても穏やかで落ち着きが感じられた。
- ・ そっくりにつくられている野菜の模型をもってきて、食べる真似をする。
- \* 実際に口に入れないで、口を動かし食べているようなつもりになれるのは、象徴的表現の始まりであり、言葉も象徴化された記号表現の一つであって、このことは、言葉が育つ上で大切な一過程であることを説明する。

#### 11／18 嬉しそうに教室に入ってくる。

- ・ 1ヶ月ぶりだがセンサーボックスのところに行き20分ほど集中し楽しむ。
- ・ 今までバラバラにし、ばらまくだけだった形はめを7つぐらいはめることができるようにになった。
- ・ 絵をかく→

家では、

- ・ 自分からおばあちゃんを誘い、遊ぶようになった。
- ・ 人見知りをしなくなった。

- ・ 「いや」という言葉が言えるようになった。その他にアン（アンパンマン）、ママ、ワン、ニャンなどの言葉も出てきている。
- \* 形はめができ始めたということは、決められた枠に抵抗を持たず入ることができるという気持ちが出始めていることで、本児と関わる同じくらいの子や大人が多少本児の思うように動いてくれなかつたとしても、それを我慢したり、或いは、少し譲つて合わせていこうという心が育つてきているということであり、このことが、これからコミュニケーションを広げ、言葉の芽が育つ意味からもとても大切なことであることを話す。

11/25 略。

12/9 嬉しそうに教室に入ってくる。

- ・ 形はめを全部一人で完成させる。
- ・ アン（アンパンマン）、バイ（バイキンマン）、カ（カレーパンマン）と言って母親にそのキャラクターの絵をかかせる。
- ・ お気に入りのセンサーボックスをしばらくやり、その後滑り台、そして三輪車に乗り終わりの時間になる。母親の「終わりね」の言葉に素直に反応して帰る。

家では、

おか（おかえりなさい）、ゴーゴー（ごはん）と言った言葉が出てきており、ハイと言って電話に出たりもするようになった。

H. 4

1/13 冬休みが終わって久々の来室。Tの顔を見るなり、嬉しそうな声をあげ、微笑む。

- ・ 形はめをやる。大人が手伝うとばらして最初からやり直し、全部自分の力でやらないと気がすまない様子。
- ・ アン（アンパンマン）、バー（バタコさん）、チョ（チョコパンマン）カ（カレーパンマン）と言って母親にアンパンマンのキャラクターの顔をかかせる。

家では、

「いるよ」「おばあちゃん」といった言葉も出てきて、分かる言葉が50語ほど出てきていると、母親は言っている。

母親から

「幼稚園を1年見送って2年保育したい。主人はあまり賛成してくれなかつたが、ここで幼稚園に入って、もし、子供たちとの間で言葉が障害となつて、問題が起つたら、せっかく育ててきたこの子の言葉の芽を積んでしまいかねない。そんなことになつたら、私は、もう立ち直れない。」という相談を受ける。

\* 足利市では、3年保育が一般的になつてゐるが、まだまだ2年保育を主流にしているところは多い。それよりも何よりも母親の「せっかく育ててきた言葉の芽をこれからも大切に育てていきたい。」「母親として本児との間にやり残してきたことをあと1年かけて取り戻したい。」というその気持ちが素晴らしいとほめたたえる。

#### 1/20 いつものように嬉しそうに教室に入つてくる。

- ・ 玉さし盤（あか、あお、きいろ、みどり、しろ、ピンクの色キャップを100個差し込むことができ、いろいろな模様が楽しめる。）と形はめを長い時間やつてしまい、他のものをやる時間がなくなつてしまつて、「帰る時間だよ」と言われて泣きそうになる。しかし母親に抱っこされると、素直に私にバイバイする。

家では、

「あついねー」「おかえり」と言った言葉が出てきている。

#### 1/27 車から降り教室に入る私を見ると声をあげ、嬉しそうな顔をして向かつて来る。

- ・ 滑り台に登り、「イチ、ニ、サン」と言って飛び降りる。
- ・ 相乗りのブランコに一人で乗つて、ます母親を手で誘い一緒に乗る、そして次に私に乗れと席をあけて、誘う。

家では

「いただきます」「ごったま」といった言葉が出てきている。

母親から

「最近、今まで一度もやつたことがなかつた指しゃぶりをするようになつた。」と相談を受ける。

\* 一般的に幼児は、もっと母親に甘えたい、愛情が欲しいという欲求を覚えたときに指しゃぶりをすることが多いと言われている。「お母さんに甘えることが、どんなに自分をなごますことかを知り始めたサインかも知れません。もっと小さいときにやり

始めなくてはならなかつたものです。Kちゃん（本児）は、今、それを取り戻そうとしているのかも知れませんね。」と助言する。

2／3 略。

2／17 略。

3／9 お姉ちゃんが加わって、3人での来室。

- ・ 「プレイルームは向こうだよ」の私の言葉にお姉ちゃんがすぐ反応し行こうとすると、お姉ちゃんに向かって本児は「セー」と言い、先生も一緒だと主張した。
- ・ お姉ちゃんがいて嬉しいのか、いつもより動きも大きく、競って頑張っているようにも見えた。ブランコ、トランポリンを一緒にやり、トンネルでは鬼ごっこして楽しんでいた。

教室内では、母親にアンパンマンのキャラクターの絵をかかせるときのアン・バー・ジャー・ドのほかに「イタイ」「バイバイ」といって言葉が出ていた。

家では、

『親の言っていることばの意味が分かってきてているようで、「コップを持ってきて」というとコップを持ってくるようになった。』と母親は言っている。

4／13 お姉ちゃんと一緒の来室。Tの顔を見ると「センセ」と言って微笑み飛び上がる。

- ・ 「センセ」「チーちゃん」「ママ」と言ってトランポリンへと誘う。
- ・ 滑り台に登るとき、わざと転び「タスケ」と言って助けを求め、助けてあげると、「アリガトウ」らしき言葉が帰ってきた。
- ・ 以前は、ぬいぐるみに興味を持たなかった本児であったが、パンダのぬいぐるみを抱っこしてあげたり、滑り台から滑らせてあげたりするようになった。

家では

「おばあちゃん、ポンポ イタイ」「パパ、ハヤク」といった2語文、3語文が出てきている。

母親の報告によると、食事中、本児に箸を入れられるのも嫌った父親が本児に対しても母親に対しても優しくなってきたと言う。表情豊かになった本児が可愛くなってきたようだ。

4／20 来室の際、Tの顔を見ると「おは」と言ってニコニコと頭を下げ、挨拶をする。

- ・ 形はめの中では一番難しい、簡単なピクチャーパズル的なものも何処からやれば、やりやすいかが分かってきたようで、短時間で仕上げてしまう。
- ・ 「パンダ」と言ってパンダのぬいぐるみを抱き、「1 2 3 4 5」と言って、一緒に滑り台から滑ったりする。
- ・ 「ママ」「センセ」と言ってトランポリンへと誘う。
- ・ 母親に「アン」「バー」「チョ」「カ」と言ってアンパンマンのキャラクターの絵を書いてもらっていたが、「バー」と言っているのがバタコさんでもバイキンマンでもないようで通じなくなってしまい怒り出してしまい、母親をたたく。しかし、すぐに諦め次の遊びへと移る。（こだわりが薄れてきているようだ）

家では、

「ママ、ちょうどがいた」という新しい3語文が出ている。

4／27 いつものように嬉しそうに来室。

- ・ 一通り3種類の形はめをやってしまわないと次の遊びへと移らない。自分で決めているようだ。
- ・ プレイルームに行く途中、「センセイ」と言ってTが行くまで待っていて、手をつなごうとする。
- ・ 本物そっくりの果物・野菜の模型に興味を持ち、それを話題に母親に話しかける。（言葉は、はっきりしないが3語文のような感じで話していた。母親は分かっている様子。）
- ・ 三輪車に「ママ乗って」「先生乗って」を「ママ、ノ」「センセ、ノ」と言って母親と私に指示する。
- ・ 私と鬼ごっこをし、たいへん喜ぶ。
- ・ トンネルの中でジャンケンをする。

家では、

言葉の模倣が始まっている。

「ホン」だったら「ホ」というように親が言った言葉の語頭を言う。

5／11 いつものように、嬉しそうな顔をして教室に入ってくる。

- ・ 3種類の形はめと玉差し盤といった一人でやる遊びをやり、プレイルームに

向かう。

- ・ プレイルームでは、果物・野菜の模型セットを広げて遊び、果物・野菜の名前を言う。

みかん	み
きゅうり	きゅ
もも	も
かぼちゃ	かー

家では、

「パパ で おこう」（パパ、おでかけしよう）

「ばあちゃん ご で」（おばあちゃん、ごはんができた）

が言える。

5／25 教室に入りTの近くに来ると「こんにちは」と言っているような感じの言葉で嬉しそうに挨拶する。

- ・ 形はめ、おしゃべり犬、ジグソーパズル（9ピース～12ピース）、滑り台、玉差しといって一人遊びを楽しそうにやった後、トンネルを見ながら私に目で「追いかけて」と合図する。
- ・ 鬼ごっこの中で「よーい」「もういいよ」を言っている。

家では、

「パパいって しゃい」（パパいってらっしゃい）

「ママ ご」（ママごめんなさい）

が言えている。

\* 母親の姉が1年ぶりに本児を見たとき、「Kちゃん（本児）の顔つきが、すっかり変わった」「すごく優しい顔つきになった」と驚いたという。「それは、何よりもお母さんの努力の結果ですよ。」と、母親をほめたたえる。

6／1 略。

6／8 嬉しそうに教室に入って来る。

- ・ 玉差し盤を差していき、最後に1つ青い玉がないことに気付き、「どこ」と言しながら捜す。
- ・ 果物・野菜の模型を1個ずつ取り出し、「メロ」（メロン）、「み」（みかん）

「に」（にんじん）と言って並べる。並べ終ると後片付けもきちんとできる。アヒルの車に乗り、押したり引いたりしてもらって、喜ぶ。動かしてもらっている間「セン」「ママ」と言って手を振る。

家では、

「パパ見て」「ない」といった新しい言葉が出てきている。

母親から発音が幼児音であることの相談を受ける。

- \* 「赤ちゃんの時から話すという行為が少なく、最近話すことが多くなった訳だから、当然発語器官の発達は遅れます。でもそれは仕方のないこと、後々、話す言葉が増えしていくことで発音は、段々に治っていきます。心配しないでください」と答え、安心をはかる。

#### 6／15 嬉しそうに教室に入ってくる。

- ・ 平均台に乗ってジャンプ、ブランコ、ラッパを吹きながらの滑り台と意欲的に一人遊びをする。
- ・ 新しい形はめに挑戦。手に持ったものがなかなか合わないでいるとき、それにこだわらないで、違うものに切り替え、進めていくことができるようになった。

#### 7／6 Tより先に教室に入っていて、Tが後から顔を出すと、「来た」という感じで飛び上がり嬉しそうな顔をする。

- ・ この教室に来たら必ずやらなければ気が済まない一人遊び（3種類の形はめ、玉差し盤）をやり、その後あいえお板を一人でせっせと並べた。あまり一人遊びを長くやらせててもと思い、ケースから文字板を持って渡してあげるまでの作業をTがやるようにしたら、受け入れてくれて2人でできるようになった。
- ・ また、Tがわざと渡すことを止めたりすると、渡してくれるまで待っていた。
- ・ 3本のバットを持ってきて母親とTに1本ずつ渡し、3人で転がしたボールの打ち渡しを始めた。それをやりながら、母親がTに家でのことを話しているとき、「パパ」という言葉に反応して、
- ・ 「パパ、ババー」「チー、ババー」「ばあちゃん、ババー」と言ってTに教える。
- ・ 七夕集会のために用意されていた短冊にTが「アンパンマンかいて」とお願いすると、「いや」とはっきりした言葉で拒否する。

- かくれんぼをする。小さなトンネルに隠れ、Tの「もういいかい」と言う言葉に体を埋め、Tの「どこへ言っちゃったのかな」という言葉に「バア」と言って笑いながら顔を出す。



## 9. 考察

1年前、自分の遊びに人（親、姉、近所の同じくらいの子）の介入を許さず、ただただ一人で遊び、話す言葉も10個程度しかなかった2歳4ヶ月の本児であったが、今では、「もういいかい」「もういいよ」と言いながら人とかくれんぼをするようになり、言葉数も日を重ねるごとに増え、いくつかの2語文、3語文を話すまでになった。

また、顔つきも人を受け入れようとしない厳しい顔つきから愛想の良い柔らかい顔つきへと変わってきた。

ここまできたのは、本児の持つ元々の発達能力があったことには疑いはないが、今までの接し方を反省し、本児を受容し、本児との共有する時間の充実を図るのに惜しまず努力し続けてきた母親の姿があったことは見逃せない。

ことばの教室での本児への働きかけは、本児のペースを第一に、本児がやりたいまま、動きたままを大切にし、それに合わせ、本児が許す範囲で介入するといった形をとり、楽しい時間を図ってきた。

### 主な相談内容

- 夫が母親に対しても子供に対しても、自分本位の愛し方しかできること。
- 本児が手をやかせない子であったために、ついつい上の子に関心がいってしまったことへの反省。
- 兄嫁に「この子は自閉症よ、知っている自閉症の子に症状がそっくり」と言われ、たいへん悔しい思いをしたこと。
- 足利市では、3年保育が普通になっているが、2年保育ということで1年間、母・子の時間を大切にし頑張りたい。

e t c.

しかし、こうした愚痴や相談内容は、回を重ねるごとに減り、年を明ける頃から、段々と一般的な教育的話題へと変わって来ている。

それは、母親の不安や心配を聞き入れ、本児の発達を一緒に考えててくれる場（ことばの教室）ができたことで、母親の情緒が安定していき、安定した分、母親は本児を受容し、本児との共有する時間にそのエネルギーを注げるようになったからではないだろうか。そして、それが基になり本児の中に、母親との信頼の芽が育ち、やがて、母親以外の人への信頼へと育っていったのではないだろうか。

人との関わりが良くなり、言葉が増えていく本児を目のあたりにする母親の情緒は益々安定したものになっていったことだろう。

そして、また、その余力は、夫へも向けられていった。「食事のとき、自分のものに本児が箸を入れるのも嫌った父親が、優しくなり、本児を可愛がるようになった」と報告があった。それは、母親が明るく、優しくなると同時に、本児の微笑みが父親にも注がれ、父親の情緒も安定するとともに、本児への可愛さが増していったためだったと思われる。

教育相談による母親への援助が、こうした家族の良い環境を生み出し、育ててきているのではないだろうか。

### 終　わ　り　に

日頃、言葉の教室の指導の在り方については、いろいろと議論されているところだが、ことばの教室通う構音障害・吃音・緘黙・そして、言語発達遅滞（脳損傷を伴うものも含む）といった症状を持つ子供たちについては、その殆どが、なんらかの心因的な要素をも含むことが多く、まさにそのことが、症状を拡大化させている、そのため、その心因性への配慮を加えた援助指導の必要性を日頃強く感じている。

ことばの教室で一人の子に指導が用意できる時間は、多くても週1回45分程度のものである。

その時間、子供だけに密度の濃い指導・関わりをしたところでどれだけの効果が得られるかは、疑問である。

事例にみる幼児は、母親の情緒の安定と共に症状が改善の方向に向かい、言葉を獲得し始める。

そこには、母親に情緒を安定させるための週1回の援助指導（教育相談）があり、そこから発展した家での母子の関わりがある、その関わりが指導の回を重ねるごとに育っていったからではないだろうか。つまり、指導の手が教室から母親に委ねられ、それが繰り返されるサイクルの形で存在したからだと考える。

指導を受けた母親はある程度ほっとした気持ちで帰り、家で子供と過ごす。そして、1週間少し遅れ悩み始めた頃、また充電にやってくる。これを繰り返すことで子供の心因的要因も少しずつ取り除かれていく。一人悩み苦しみ、袋小路に入ってしまった母親のもとでは、子供の改善は望めない。

今まで述べてきたことは、ことばの教室における指導的一面にすぎないかも知れない、しかし、こうした良い環境を作り出し、子供を療育することの効果は大きいと考え、これからも努力し続けたい。

## 評

本論文は、「ことばの遅れた子への援助」の在り方を、その親への教育相談的関わりを通して、実践的に研究したものである。

「言葉の教室」等へ通う子どもたちが見せる問題の症状には様々なものがあるが、筆者は多くに症例と対応している豊かな経験の中から、諸症状に内在する心因的要素に着目しそれへの配慮を加えた援助指導を施した。特に、これまで、苦悩しながらも、本児を受容し、本児との共有する時間の充実を図ることに努力し続けてきた母親の姿を大切に受け止めている。

「言葉の教室」での本児へのかかわり方は、あくまでも本児が示す関心や意欲、行動を大切にし、それに合わせ、援助指導の手を差し延べながら楽しい時間の共有に努めた。一方、母親に対しては、悩み・心配ごとをじっくりと辛抱強く傾聴し、一貫して受容的な態度で接し、母親の情緒の安定を図ることに努めた。結果として、母親は、次第に自身の「愚痴」から解き放され、落ち着きを取り戻し、我が子の成長を大きく見守れるようになってきている。そして、本児には、母親との信頼の芽が育ち、母親以外の者への信頼が広がり、次第に「言葉」が育ってきている。これら両者の姿が、家族関係を円滑にし、善循環を生むにいたり、本児の「言葉」の増加を一層促す原動力となってきている。

これらのことから本研究は、子どもの健全な成長にとって、とりまく環境、特に親のかかわり方がいかに大きく影響するか、そして諸症状の改善に向けて努力するとき、機能回復への手立てを施すことのみならず、心の内面へ目を向けた辛抱強く温かい援助がいかに必要であるかを明快に実証したものと言えよう。

本研究が、様々な子ども達を預かり、その成長にかかわる、学級担任をはじめ諸先生方にとつて大きな参考となり、力強い支えとなることを確信している。